



■ 観察会、ガサガサ体験など

復 元された里山公園で、今年も池干し体験!

5月17日、6月1日 魚と子どものネットワーク (三重県)

三重県亀山市の「里山公園みちくさ」は、3町にまた がる約3.5haの荒地を多くの生きものが生息できる環境 に戻そうと、市が池、湿地などの水辺を整備し、復元し た公園です。魚と子どものネットワークは2008年頃、 魚が棲める水環境を保全し、それを次世代に伝えていく ことを目的に結成された市民団体(会設立は2011年) ですが、結成当初から同園の保全にも全面的に協力し、 希少種ヤリタナゴのモニタリングや環境学習などを実施 して来ました。

毎年行う池干しもそのひとつ。池干しとは池の水を抜 き、池底のヘドロを陽にさらして良質な泥に戻し、外来 種などを駆除して、もともといた生きものが住みよい環 境を取り戻す活動。今年も5月17日に、水辺の保全活 動に実績のある東海タナゴ研究会(岐阜県)の指導のも と、池干しと自然観察会を実施しました。83名の参加 者はあらかじめ水位を下げた池に入り、泥だらけになっ て生き物をつかまえました。自然観察後の解説コーナー では、子どもたちから大人顔負けの質問が飛び交い、生 きものや環境をよく知る子どもたちが着実に育っている ことがうかがわれました。同会代表の新玉拓也さんは、 イベント後、

「私たちはどうすれば自然の魅力や生きものを守る大 切さを伝えられるか、日々考えながら活動しています。 次世代を担うこどもたちが自然の大切さに気づき、行動 できるよう、今後も活動を続けていきたいです」と語り ました。



自然観察後の解説コーナーでは、東海タナゴ研究会制作の紙芝居も上演



左)水位が減った池に入り、大人も子どもも夢中で生きものをつかまえる (右上)里山公園みちくさは市が環境復元をめざして整備している公園。市内の 小学生を対象に田植え、稲刈り、餅つきなどの体験も (右下)今日とれた魚や エビ類などについてのお話を聞く

プ

ール開きの前にヤゴ 400 匹を保護

5月24日 北川かっぱの会(東京都)

狭山丘陵は宮崎駿監督の映画『となりのトトロ』の舞台のモデルになったといわれる地域で、北山公園も野草が繁り、野鳥が飛ぶ自然公園。北川かっぱの会はその周辺の緑の保全と、目の前を流れる北川の清流復活という夢を掲げて発足し、約20年の歴史をもちます。北川は東村山市と市民団体の協働により、04年にはコンクリート護岸から自然護岸に復元され、魚道も整備されています。

同会は北川の清掃や外来種駆除などにも取り組んでいますが、近年、積極的に行っているのは子どもたちの環境学習支援。特に、この地域の小学校では土曜日に地域のボランティアの方々が講座を受け持ち、学校と協力して子どもたちにさまざまな遊びやスポーツをさせる「土曜子ども講座」を行っていますが、北川かっぱの会もこれに協力。今年も9回ほどの支援を予定しています。

5月24日、市立北山小学校で行われた「ヤゴ救出作戦」 もそのひとつ。プール清掃の直前、集まった24名の子 ども、10名の大人が水が減って浅くなったプールに入り、 ヤゴを捕獲。アキアカネ 147 頭、ギンヤンマ 262 頭ほか、412 頭のヤゴを救出しました。ヤゴは各自持ち帰って観察する分、学校で観察する分を取り分けて、あとは北山公園の池へ。たくさんのヤゴが羽化し、多くのトンボに会えることを楽しみに、子どもたちが放流しました。



どれどれ、何匹入ったかな \sim ? 日差しの強さにも負けず、たくさん救出しようと奮闘

9

年目「ぼてじゃこワンパク塾」は今年も大盛況

6月8日 ぼてじゃこトラスト(滋賀県)

ぼてじゃことは琵琶湖周辺地域におけるタナゴの呼び名です。かつて琵琶湖では普通に見られる魚でしたが、環境の変化やブラックバス、ブルーギルなど外来魚の増加により激減し、今ではほとんど見られなくなりました。ぼてじゃこトラストは名前の通り、そのぼてじゃこに代表される小魚と、小魚たちが生息できる環境を守ろうと1996年に発足しました。希少種イチモンジタナゴの保護池をつくり、野生復帰の道を模索するほか、各地の調査も実施し、現在では滋賀県内の魚と水辺の生きもの分布やその生息環境の実情、実態に精通した団体に成長しました。

子どもや親子を対象にした活動も充実し、幼稚園や小学校で生きもの教室を開催したり、滋賀県の事業に伴い実施される生きもの観察会や、自治体・公民館などが主催する観察会の指導にあたるなどしています。中でも、2005年に開講した「ぼてじゃこワンパク塾なま~ず」は親子会員を募り、川遊び、雑魚捕り、雑魚釣りを楽しんでもらうプロジェクト。その中で、9年目の今年も6月8日に地引網体験、7月5日に瀬田川外来魚釣りを実施しました。どちらも外来魚を駆除して、在来の生きも

のを保全する活動ですが、地引網は大人36名、子ども32名と大盛況。漁獲高は例年に比べ、著しく少なかったものの、地引網のあとに行われた外来魚の解剖教室では、子どもたちが食い入るように外来魚の胃の内容物などを見ていました。外来魚駆除釣りは大人15名、子ども12名の参加で、多数のブルーギルが釣れました。



7月5日に行われた勢田川での外来魚駆除釣りには27名が参加。多数のブルーギルを駆除しました

今

年のおおさき生き物クラブは 100 人で魚とり!

栗駒国定公園やラムサール条約湿地、そして広大な水田や小川、ため池など、豊かな自然環境に恵まれた宮城県大崎市では、「自然と共生した持続可能な地域社会づくり」の担い手を育てようと、昨年4月「おおさき生き物クラブ」を立ち上げました。これは小中学生を対象とした月1回の遊びと学びのプログラム。4月~7月の一般プログラムと、4、5月の参加者から参加希望者を募る7月~翌年4月の専門プログラムから成り、同市内に拠点を置く6つの市民団体が持ち回りで植物、昆虫、魚、鳥などに関する講座を担当しています。

NPO 法人シナイモツゴ郷の会は 6 月の講座「シナイモツゴとゼニタナゴを守ろう」を担当。当日は小学 1 年生 ~中学 3 年生の子どもたちとその父兄約 100 名という大人数が鹿島台町の小川に散開し、手網による魚の捕獲を思い思いに楽しみました。とれた魚はメダカ、スナヤツメ、ドジョウ、オイカワ、モツゴ、タモロコなど。終了後は鹿島台学童農園に場所を移し、会が準備したエコ米「シナイモツゴ郷の米」(P.12 も参照) や味噌汁を食べたあと、捕獲した魚を観察し、シナイモツゴ郷の会副代表の高橋清孝さんによるお話を聞きました。子どもたち

6月7日 NPO法人シナイモツゴ郷の会(宮城県)

からは「お魚はなぜくさいの?」、「アマガエルのオタマジャクシは何を食べているの?」など、活発な質問が飛び、 関心の高さを感じさせました。

同会は希少種シナイモツゴやゼニタナゴの復元にも取り組んでいますが、昨年、シナイモツゴの卵を預けた6つの里親小学校から2年連続で1000匹以上の稚魚を回収(今年は1200匹!)。6月26日には育った稚魚の放流会が鹿島台町宮の沢ため池で行われ、参加した約103名の子どもたちが、稚魚を大切に放流しました。



ぼくがとったお魚だよ! 魚とりのあとの勉強会でも、子どもたち元気いっぱい

术

ーイスカウトがザリガニ駆除



この日のアメリカザリガニの駆除数は全員で 2506 匹、これまでの累計捕獲数 9 万 285 匹!

6月15日、神奈川県横浜市にある三ツ池公園では、三ツ池公園を活用する会恒例のアメリカザリガニ駆除釣りが行われました。この日は地元鶴見地区ボーイスカウトのカブスカウト(小2~小5)、ビーバー隊(年長~小2)、指導者や保護者約100名が参加。同スカウトによる「第1回アメリカザリガニ防除活動」と謳い、ザリガニ駆除に取り組みました。

駆除に先立って挨拶式が行われ、同会を代表して天野

6月15日 三ツ池公園を活用する会(神奈川県)

隆雄さんが活動について説明。参加者からは「なぜアメリカザリガニをとるのですか」、「とったザリガニをどうするのですか」など質問が続々と。ザリガニ釣りが始まると、ほとんどの隊員ははじめてだったため、興奮に目を輝かせて取り組みました。地区全体では今後も年に1度の参加を予定しているそうですが、中には秋の参加も検討している団があるとのことです。

三ツ池公園を活用する会では2006年から約7年間続けた外来魚駆除活動を2013年10月のかいぼり(池干し)でいったん終了に。第1回かいぼり時に数十匹しか見られなかった在来魚モツゴが、最後のかいぼりでは4万匹を数え、駆除活動の効果が確認されました。そこで次の段階として、全国的に影響が心配されているアメリカザリガニの駆除を重点的に行うことに。アメリカザリガニはしぶとく、なかなか減りませんが、同会では今後も地道にアメリカザリガニほか外来種の駆除に取り組み、在来の生きものの復活を目指すとのことです。

佐

渡に水辺の生きものを守る市民団体誕生!

6月14日、15日 佐渡在来生物を守る会(新潟県)

トキに象徴される固有の生態系を守ろうと、数年前から佐渡島ではため池の外来魚駆除活動が行われています。そんな活動を通じて育まれたきずなを土台に、水辺の生きものを守る新しい団体、佐渡在来生物を守る会が誕生。6月14日、新潟県佐渡市にあるトキ交流会館で、設立総会と記念講演会「佐渡の自然を守り伝えるには」が行われました。定年退職後、故郷の佐渡に帰り、水辺の生きもの保全活動にかかわるようになった新団体代表の品川三郎さんは、「行動しながら学習し、事故なく楽しくをモットーに会を運営したい」と抱負を語りました。

翌日はエクスカーション。佐渡島内の小学生が無農薬の米づくりを通して、人と生きもののつながりについて学ぶ「佐渡 kids 生きもの調査隊」(佐渡生きもの語り研究所が実施)で初の外来魚駆除釣りが行われるのを、新団体がサポートしました。今回の活動は「外来魚を釣って食べてみたい」という子どもたちの希望で実現したものだそうです。

当日は、これまで佐渡における外来生物駆除活動を実施・支援してきた生物多様性保全ネットワーク新潟ほかも協力。子どもたちはまず、外来魚が佐渡の生きものたちを追い詰めること、駆除する活動の重要性についてお話を聞き、続いて、昨年外来魚駆除の池干しが行われた金井新保堤で駆除釣りにチャレンジ。駆除されたブラックバスとブルーギルを品川さんらに料理してもらい、試食しました。





(上) 佐渡 kids 生きもの調査隊のメンバーたち。日頃から生きものに親しんでいるだけに、魚にさわる手つきも慣れたもの (下)講師は環境省佐渡自然保護官事務所の自然保護官、遠矢駿一郎さん(写真)と全国ブラックバス防除市民ネットワーク事務局長、小林光さん

里

山歩けば発見がいっぱい! 子ども探偵団

6月28日 認定 NPO 法人宍塚の自然と歴史の会(茨城県)

宍塚大池を囲む 100 ヘクタールの里山の保全活動に取り組む認定 NPO 法人宍塚の自然と歴史の会には、たくさんの自然観察プログラムがあります。「里山子ども探偵団」は名前の通り、子どもたちが里山を探検して歩くイベント (毎月第4土曜日 10時~12時)。予約不要、気軽に参加できるのが特徴です。参加者は毎月土浦市、つくば市で配布される1万5000枚のチラシを見た子どもや親子。当日は会のメンバーが案内しますが、メニューはその日の里山のようす、集まったメンバーなどによって決まります。

たとえば6月28日の「里山子ども探偵団」は、雨が やんだ直後の里山に子ども11名と保護者7名が集合。 まず、田んぼ周辺で生きものを採集し、トンボのヤゴ、 ヒゲの生えたドジョウの子の顔、ゲンゴロウがお尻に空 気の粒をつけているところなどを観察。続いて小川に移 動し、クモの巣、まだ翅の生えていないカマキリなどを 発見し、アメリカザリガニとりに熱中しました。案内役

の阿部きよ子さんは「この季節はいくらでも観察できる生き物がいる。私も初めて見るものが何種類かあった。子どもたちといると、小さなものにも気づけて楽しい」と感想を語りました。(P.12 も参照)

斜面林の下の水路でガサガサにトライ! 残念ながらとれたものはアメリカザリガニが中心でした



ナ

マズがとれて大喜び! 6月の定例調査

6月14日 水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座(三重県)



大きなナマズが複数! 見てください、この満面の笑顔

6月14日、水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座は、鈴鹿川の支流、椋川で定例の魚類相調査を行いました。同会は2002年の発足以来、三重県北部の鈴鹿川と中ノ川流域を対象に水辺づくり活動を行っていますが、その内容を「過去を知り」、「今を知り」、そして「未来を創っていく」の3つに区分しています。「過去を知る」では流域の約

150 集落、500 名の高齢者に魚の方言、漁法、昔の川の 状況などの聞き取り調査を実施し、『鈴鹿川における魚 の昔の呼び名』などを出版しています。そして、定例調 査は「今を知る」ための活動として、流域の本支流、た め池、小川等の状況を定期的に調べ、生息する水辺の生 きものの現況や川の状況を把握する活動です。

この日参加した会員の小林輝彦さんは「本音をいうと、ウナギやナマズがとれないかな、希少魚がとれないかなと楽しみながら調査をしています」と語りますが、定例調査の10年以上の積み上げで、どこに何がいるか、希少魚や外来魚の生息状況はどうか、工事などにより水路がどう変わったかなどを、会はしっかり把握しています。それをもとに、「未来を創っていく」ために外来魚駆除活動や希少魚の保全活動、河川管理者との意見交換会なども実施。これらの活動により、2012年には地域環境保全功労賞(環境大臣賞)も受賞しています。

6月14日の調査では、10種の魚類、甲殻類を確認。 50センチ大のナマズが複数捕れ、参加したメンバーみ んなで大喜びしました。

地

引網に定置網、外来魚を駆除して食べて

6月15日 NPO法人秋田水生生物保全協会(秋田県)

6月15日、秋田県大潟村の大潟村干拓博物館では、NPO法人秋田水生生物保全協会が主催したイベント、「八郎湖の外来魚(ブラックバス)を駆除して在来魚(ザッコ)を守ろう」が開催されました。当日は約50名の子ども、学生、大人が時間前から受付に並び、まず同会代表の杉山秀樹さんから「八郎湖の実際を自分の眼で見てください」との挨拶が。続いて、西部小水路に移動した参加者は胴つき長靴を履いて水の中へ入り、前日に設置された小型定置網の中身を見たり、手網で魚とりをしたり、地引網を引いたり。初めての経験に大きな歓声が響き渡りました。とった魚を計測し、外来魚は解剖して胃の中身も確認しました。

会場に戻り、今日とれた魚をミニ水族館で観察したあとは、ブラックバスから揚げの試食です。一番人気は甘酢あんで、「おいしいお魚なんだ!」と驚きの声が上がりました。午後は「外来生物法制定から10年、何が変わったのか」をテーマにミニシンポも。学生と大人が会場に残り、話題提供や意見交換に耳を傾けました。







(上) 胴長を履いて手網をもてば、それだけで胸はワクワクです (左下) 捕獲した外来魚は重さを測ったり、お腹を開けてみたり (右下)さあ、やっとこのときが! 意外にもおいしい外来魚に驚きの声も

■ その他の水辺保全活動

海

藻おしばで学ぶ「海を守る暮らし」

7月21日 NPO法人水辺と生物環境保全推進機構(東京都)

7月21日、東京都江東区立環境学習情報館「えこっくる江東」の事業に協力し、NPO法人水辺と生物環境保全推進機構が「すてきな海藻おしば作品作り」を開催しました。同法人はもともと海の汚れに衝撃を受けた釣り人が立ち上げた団体。海を汚さない暮らし=汚れた水を家庭から流さない暮らしを普及しようと、さまざまな環境教育を行っています。

海藻おしばもそのひとつ。文字通り、さまざまな海藻をハガキや画用紙に張りつけてつくるアートですが、赤や緑の透明度のある海藻でつくられる作品は色鮮やかで、大変人気があります。今回も親子 24 組の募集に何百人もの応募がありました。

当日はまず、海についての環境学習からスタート。海 藻が海の中で草原や森をつくり、生きものを育んでいるこ とを説明し、藻場を撮影した DVD を上映。その後、8 種 類の海藻が各テーブルに配られ、参加した親子がめいめ いおしば作りを楽しみました。作品は同会のメンバーが 毎日乾燥のための紙を入れ替えて完成させ、郵送で自宅 に届きます。最近は町起こしに海藻おしばを活用したい 海辺の自治体からの依頼で、海藻おしばインストラクター 養成講座を地元で開催する機会も増えているそうです。







(左)会場にズラリと並べられた、海藻おしばのサンブル。華麗で幻想的。これが海藻でできるなんて! (右上)この日配られた海藻はマクサ、フシツナギ、モツレグサ、フサノリ、トサカノリ、ホンダワラ、スギノリ、アオサの8種類。親も子も真剣です (右下)おしばづくりの前にはしっかり環境教育。「海の中には森や草原があります」大事にしなくちゃね

と って食べたよ、琵琶湖の幸!!

7月21日 琵琶湖を戻す会(大阪府)

琵琶湖から外来魚を駆除し、もともといた魚を戻す活動に取り組む琵琶湖を戻す会。毎年7月末、漁師さんの協力でエリ(琵琶湖伝統の定置網)にかかった魚を参加者が取り上げる体験ツアー、「エリ漁体験&地引き網体験」を実施してきましたが、今年は通常のツアー(7月20日)に加え、7月21日に「琵琶湖の幸を捕って食べよう2014夏」を実施。これは名前のとおり、通常の体験のあと、今日ではなかなか気軽に食べられなくなった琵琶湖産の魚を思う存分食べようという企画です。

参加者は募集のほぼ直後に満員に。当日は漁師さんの船に乗って沖に出、まず北湖の湖岸で地引き網を体験。続いて、南湖のエリに移動し、「ツボ」と呼ばれる部分を引き上げる作業を希望者が手伝います。そして、狭められた網の中の魚を交代で船に取り上げましたが、ほとんどがブラックバスとブルーギル、つまり外来魚だという事実に一同改めて愕然としました。

その後、「びわ湖漁師料理の店 居酒屋来ゃん太」に 移り、お待ちかね湖産魚尽くしの昼食会です。これは漁 師さんが半年前から季節ごとにとりためておいた琵琶湖の幸を、漁師さん自身が料理してくれたもので、ビワマス、イサザ、コアユ、ハス、オイカワ、カマツカなどが20点の料理となって並びました。その豪華さに同会代表の高田昌彦さんも思わず「あり得ない食事でした」とポツリ。食事中、漁師さんから「外来魚におびやかされているおいしい琵琶湖産の魚を、大事に思う気持ちを多くの人持ってほしい」というお話が。参加した皆さんは琵琶湖の幸を味わいながら聞き入っていました。





(左)スペシャルなイベントでしたが、お馴染みのスタイルで「ハイポーズ」は一緒でした (右)琵琶湖特有の魚の料理が 20 種類も。あっというまに食べられてしまいました

水辺保全気になるニュース

市民による防除は想定外 !? 特別採捕許可で関係省庁と意見交換

全国の都道府県では、水産資源の保護増殖を目的とした漁業調整規則を設け、公共の河川や湖沼で使用する漁法や漁具を規制しています。水産資源の保護は重要ですが、一方でNPO法人や市民団体がこの規則のため、外来魚防除に支障をきたすケースが増えてきています。

最大の課題は、外来魚などの防除に有効な漁法・漁具のほとんどが禁止または使用を制限されていることです。刺網や定置網はもちろん、ペットボトルで作れるワナ(セルビン)や、数百円で購入できるモンドリも禁止漁具、東京都ではたも網によるガサガサも禁止漁法です(「押網に該当する」との判断)。これらの漁法や漁具を用いるためには、都道府県から特別採捕許可を得なければなりません。

ところが、条文には特別採捕の目的に「防除」という記載がないため、「試験研究」で申請しなければなりません。しかし、「試験研究」を公的機関に限り、民間からの申請を受けつけない自治体もあります。公的機関とは国や地方自治体、大学、公立の研究機関を指し、NPO法人や小中高校は対象外です。環境大臣・農水大臣から外来生物法による防除認定を受け、外来生物の防除に取り組む NPO 法人でも、特別採捕の申請者になれないと

いう制度上の不整合があります。これにより、民間団体 や学校などへの防除の普及が妨げられ、外来生物問題啓 発の機会が失われているのが現状です。

そこで、4月21日、外来生物法による防除認定を受けている認定 NPO 法人生態工房とノーバスネットが水産庁を訪ね、同庁および環境省の担当官と意見交換を行いました。漁業調整規則は都道府県の規則であり、水産庁が主導できないのが実状です。しかし、最近では防除認定との不整合を認識している自治体も増えたため、今後は関係省庁で改善策を検討していくとのことでした。

2020年までに外来生物に関する愛知目標 (「侵略的外来種が制御され、根絶される」) の達成をめざすには、地域の NPO 法人や市民が防除やモニタリングに長期に関わる必要があります。自治体や関係省庁には現制度の課題を共有し、市民による生物多様性保全の観点を盛り

込み、時代のニーズに 合った改善が期待され ます。(文/片岡友美)



公有水面では許可なく外来魚駆除はできない。写真は私有地内

城北ワンドのイタセンパラから稚魚。 9年ぶりの確認!!



野生での生息が確認された淀川のイタセンパラ稚魚(写真提供/イタセンネット)

5月8日、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所は、国の天然記念物であるイタセンパラ(コイ科タナゴ 亜科)の稚魚約600匹を、淀川の城北ワンド(大阪市旭区)で確認したと発表しました。同事務所と大阪府立農林水産総合研究所は、淀川水系でほぼ野生絶滅に近いこの魚の野生復帰に取り組んでいますが、昨年10月には放流場所を明らかにした初の放流を行いました。今回確認さ

れたのはその第1世代から生まれた第2世代で、冬~春に二枚貝の中で越冬し、4月下旬に貝から出て泳ぎ出したものです。同ワンドで野生の個体(稚魚)が確認されたのは2005年以来、9年ぶり。官民一体で外来魚を駆除し、環境を整備してきた成果といえます。河川事務所河川環境課の濱田博さんは、「淀川のイタセンパラ野生復帰事業の目標は5段階に設定されていますが、4段階めに当たる『野生復帰の個体群が大きくなること』を実現すべく、さらに生息環境の整備と再生、イタセンパラの再導入に取り組みます」と抱負を語りました。

5月11日に開催された淀川水系イタセンパラ保全市 民ネットワークによる外来魚駆除釣り大会 in 淀川 2014 では、イベントにあわせて、現地説明会も。多くの市民、 報道関係者が集まり、この魚の野生復帰に尽力してきた 研究者の話に耳を傾けました。

亀岡のアユモドキ絶滅を憂え、日本魚類学会が市民公開講座

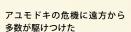
日本で3ヵ所しか残っていない国の天然記念物アユモドキの生息地のひとつを大きく改変する、京都府亀岡市のスタジアム建設計画。日本魚類学会は計画見直しを求める緊急要請などを提出してきましたが、府と市に見直しする気はなく、多額の関連予算もすでに計上・執行されているため、アユモドキの保全が保障されないまま、開発が進められてしまうとの懸念が広がっています。

そんな中、同学会が8月2日、市民公開講座「絶滅危惧種アユモドキ~東アジア風土の象徴、その危機と保全~」を、京都大学(京都市)で開催。アユモドキが日本固有種であり、東アジアモンスーン気候における河川下流域の氾濫原に適応した魚であること、氾濫原のかわりに日本の水田水域ネットワークを利用してきたことなど「アユモドキの基本」から、近畿地方のアユモドキが壊滅したのに亀岡市に残った理由まで、4人の講師が講演。京大防災研究所の竹門康弘教授は「いつ絶滅してもおかしくない現状を保全生態学の絶滅予防原則に照らすと、本来は生息環境全体を丸ごと保全すべき」としつつ、今

後検討が必要な環境保全対策をまとめました。また、岡 山理科大講師の阿部司さんは「アユモドキがいる川は生 物多様性が非常に高い。この魚を守ることは多様な環境、 生きものを守ること」とその価値を強調。講演後のパネ ル討論では、「保全には地域への愛着や人と人のつなが りが大切」などの意見が交わされました。

全体として、「スタジアム計画の環境保全対策にかかわる研究者やほかの学会などと連携しながら、アユモドキとその生息地である湿地生態系が確実に保全されるよう監視していきたい」という同学会の姿勢が明確に示された講座になりました。東京から参加した女性は「議論が活発で興味深かった。希少魚の保全には市民、農家、

行政、研究者が協働 して取り組む必要が あることがわかった」 と感想を語りました。

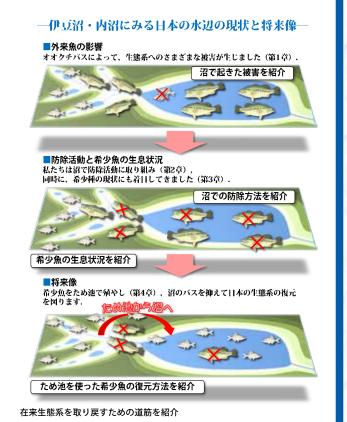




オオクチバスを駆除し、在来生態系を取り戻す マニュアルが伊豆沼・内沼から発行

公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団は 1990 年代からオオクチバス防除活動に取り組み、バスの食性や振る舞いを解明したり、外来魚駆除によって在来魚が増えることを示すなど、成果を出し続けています。近年は周辺のため池における外来魚駆除と合せて行うことで沼の外来魚を減らすシステムも考案・実施。また、ザリガニ対策、水草復活実験など、在来生態系復活に向けた多彩な活動が行われています。その財団が昨年 10月に発行・配布したのが、そのマニュアル『湖沼復元を目指すための外来魚防除・魚類相復元マニュアル〜伊豆沼・内沼の研究事例から〜』です。

著者の一人、同財団研究員の藤本泰文さんは、「追い詰められている日本の生き物を各地域で見つけ出して守り、外来魚を防除しながら彼らが戻れる水辺を地域に取り戻し、にぎやかな水辺を将来に残すことが大切。この本はそのストーリーを4章に分けて紹介しました。各水辺で最適な方法は異なりますが、ストーリーの骨格はどの水辺でも同じかと思います。よさそうな方法があったら、ぜひトライしてみてください」と内容を紹介しています。(問合せ先/同財団☎0228-33-2216)



ネクスファ (一般社団法人サステナビリティ・エンパワーメント) 休曜日の旅課後は フィールドで会おうね!

千葉県柏市の一風変わった学童保育 / 学習塾ネクスファ。昨年始まったフィールドクラブは川やその岸に位置する草地、田んぼなどで、毎週毎週、野遊びと自然観察をする放課後クラブですが、参加する子どもたちの成長ぶりに、 大人一同は驚くばかりなのだとか。

料理に理科実験に見学旅行 何でもありの学童保育メニュー

「川の真ん中を網ですくっても魚はつかまらないよ。水草 や石の下流側に網をおいて、上流側からガサガサするんだ」 「あ、いた! 何かとれたよ!」

7月17日、千葉県柏市高柳、手賀沼に注ぐ大津川の上 流部では、17名の小学生と1名の幼稚園児が手網をもち、 魚の捕獲に夢中です。指導しているのは同市在住の科学 ジャーナリスト、柴田佳秀さん。今日はネクスファが毎週 木曜日に開いているフィールドクラブの日です。

ネクスファはもともと代表の杉浦正吾さんが経営していた学習塾をベースにつくられました。その名もサス塾。「サス」はいわずと知れたサステナビリティ (持続可能性)です。地球規模の気候変動が起こるような、かつてないこの時代に、子どもたちに生きる力をつけてほしいと、教育、社会、環境問題にかかわるメンバーが集まり、2011年に開塾します。そして翌年、東京大学柏キャンパスの高齢社会総合機構、柏市、UR都市機構とのパートナーシップ事業として、サス塾のプログラムに「小学生の放課後支援プログラム」、「シニアの社会キャリアを活かしたプログラム」を盛り込んだ、新しいタイプの学びの場がネクスファでした。

学習塾部門、学童保育部門、探究クラブと3つの部門からなり、学習塾部門も「英対話」を重視するなど個性的ですが、とりわけユニークなのが学童保育部門と探究クラブです。働くおかあさんにとって、子どもを夕方まで見てくれる学童保育はありがたい存在ですが、現在の学童保育はただの「預かり」である場合がほとんど。公立の場合、保健所の指導もきびしく、おやつもナイフでカットする果物まで禁止され、スナック菓子が中心だったりします。ところが、ネクスファの学童保育は料理あり理科実験あり、博物館などへの見学旅行に農場キャンプあり、夢のようなメニューが揃っているのです。

やりたい人がやりたいこと をやるからおもしろい

メニューの数は今や 240 にも!杉浦さん、町で飲食店で「これは!」と思う人を見かけたら、ためらわず声をかけます。そして、1回1律5000円で講師を依頼。講師の中にはそのまま常連化する人も。「ぼくは声をかけて来てもらうだけ。丸投げです。やりたい人がやりたいことをやるから、おもしろいものになる」と杉浦さんは笑います。そして、同様に丸投げで2013年に始まったのが探究クラブでした。ロボットクラブは、元三菱化学㈱のエンジニアだった武藤達雄さんからの持ち込み企画でした。現在、武藤さんと建築家の大川原一隆さんを中心に、専門知識をもつシニアが集結。市内にある芝浦工大付属柏中高のチームも加わり、毎週木曜日にロボットが製作されています。

一方、フィールドクラブが生まれたきっかけは、冒頭の大津川上流部の脇にある耕作放棄地を、地主さんから「自由に使っていいよ」と言われたことでした。どう使うか悩んでいたとき、たまたま意気投合したのが柴田さんでした。柴田さんはディレクターとして NHK の自然番組を多数制作したのち、フリーの科学ジャーナリストに。現在は図鑑を執筆したり、科学番組に出演するなどしていますが、最近は自然観察会講師などの活動も増えています。

そんな柴田さんを得て、フィールドクラブは他に類のないものとなります。長期休暇を除く毎週木曜日が活動日となると、年間 40 回以上。柴田さんはスタッフの小松恭子さんと活動メニューをつくります。たとえば、ある日は地面を歩く昆虫を捕獲する落とし穴(プラスチックのカップ)を地面に埋め、翌週、かかった虫を観察します。ある日は畑の生きものを観察。最初に「フィールドと畑どっちが虫が多いか」と聞くと、全員が「畑!」。ところが、無農薬にもかかわらず、畑には虫がいなくて、フィールドには虫が多数。虫の数は植物の数に比例することを子どもたちは学びます。

この子たち、将来絶対おもしろくなると思う

室内メニューも充実で、ある日はダンゴムシについて学び、ダンゴムシレースに大興奮。またある日はクワガタやザリガニの絵をまずそら(・・)で書き、続いて、写真を見ながら書く「スケッチ」も。それにより、観察ポイントがわかり、生きものを見る視点が確立するのだそうです。

フィールドクラブは幼稚園年長~2年生までのAチームと、小学3~6年生までのSチームに分けられ、終始体験中心のAチームに対し、Sチームは年度の後半、図鑑作りに取り組みます。もともと11月になると4時には野外が暗く、室内活動に限定されるために考えられたメニューでしたが、

「みんないやがると思っていましたが、予想は大外れ。A チームの幼稚園児も一緒にすごく楽しんでつくりました」

野外活動時は必ずどの子もノートとカメラを持参し、見た生き物名を記録し、カメラで撮影しますが、そうして子どもたちが撮りためた写真の中から一番と思われる写真を子どもたち自身に選ばせました。そして、それぞれの生きものについて図鑑などで調べましたが、

「たとえば昆虫は書かれているサイズがまちまち。幼虫など、サイズがわからない場合も。でも、写真はぼくの手の上で撮影している。それなら、手のどこからどこまでの大きさか、測ればいいんじゃない?ということになって、大きさを割り出しました。応用力はすごくつきましたね」

フィールドクラブの活動と学童保育に小学3年生の息 子を参加させている川瀬美幸さんは、

「フィールドクラブのいいところは、昔でいえば秘密基地 的な楽しさ。昔の子どもたちは裏山探検のような遊びから 危険を学んだり、生きもののつながりや季節を感じました。 生き物の専門家である柴田さんと一緒に定期的に生きもの や自然の移り変わりを観察できるフィールドクラブは、昔 の子どもたちが学んだことを体で覚え、自然やや生きもの のことを考える力を養える場ではないかと思っています」

探検クラブはどちらも今年で2年目。柴田さんの予想 を裏切り、継続する子が多数出ました。

「2年やってる子はすごく変わってきました。この子たち、将来おもしろくなると思いますね」と杉浦さん。

この日、ガサガサのあとに調査のまとめをしたところ、いちばん多かったのはアメリカザリガニでした。「去年はもう少し多様な魚がいたんですけどねえ」と柴田さんはくやしそう。けれども、子どもたちは大量のアメリカザリガニに目をキラキラ。数を数えようと、もみ合うように頭を寄せたのが印象的でした。



下流に網をかまえて、水草の中をガサガサ。ほーら、何かとれたよ



とれた生きものの説明をする柴田さん。子どもたち、興味しんしん。うしろが主 な観察フィールドの耕作放棄地



千葉県柏市郊外の田園地帯を流れる大津川。流域には家の密集した場所も少なくない。





(左)わずか600坪なのに生物多様性豊かなフィールド。オギの群落の中にカヤネズミの巣も発見。「みんなでバンザイしました」(右)田園地帯の高柳にあるネクスファ高柳教室。杉の香る建物は内部に部屋が多数

おいしく食べて生きもの増やそう! 水辺の生きもの保全米

水辺の生きもの保全活動に取り組む団体の中には、環境づくりを重視し、農家と協力してエコ認証米をつくり、販売していると ころもあります。認証制度を定めている町村もあります。認証の内容は地域でまちまちですが、無農薬または低農薬で、事実生きも のを増やしている田んぼのお米ばかり。魚にも人にも優しく、おいしいお米が今年もまもなく収穫されます。ぜひ食べてみてください。

田光米



田光資源と環境を守る会は、地域伝統の共 同活動「大同」を活かした「むらづくり」を 掲げ、化学肥料や農薬を減らした/使わない 農業を実践。池干しや生き物保全には東海タ ナゴ研究会(岐阜県大垣市)が協力し、町内の 「楠根ため」は2010年に農水省「ため池百選」 にも選ばれました。2013年、田光地区内の湧 水を利用したコシヒカリをブランド化。販売 開始しています (2013年度価格で白米1キロ 600円、5キロ1700円)問合せ:田光資源と 環境を守る会 ☎ 059-396-0314(諸岡 稲造)

宍塚米



林、池、湿地、田んぼなど多様な自然から 成り、生きもの豊富な谷津。そんな谷津を守 るには農家の協力が不可欠と、宍塚の自然と 歴史の会は農家が低農薬でつくったお米を買 い取り、オーナーに送る宍塚米オーナー制度 を開始。今年で16年めになります。お米は コシヒカリで、精米5キロ3200円、玄米 30 キロ1万2000円など(いずれも送料込 み)。同会が耕作する田んぼでの稲作体験に も参加できます。問合せ:同会米オーナー制 事務局☎ 029-821-3519

朱鷺と暮らす郷作り認証米



エコファーマー認定を県から受けた農業者 が農薬や化学肥料を減らすだけでなく、「生き ものを育む農法」(田んぼを乾かす中干し期に も深みをつくり水を溜める、冬も湿地状態を 維持する、魚道や水田と隣接したビオトープ を整備するなど)で栽培したと認定されたお 米です。佐渡市農業再生協議会が現地を確認 し、認証されます。佐渡産コシヒカリは日本 穀物検定協会のランキングで毎年「特A」を 得ており、認証米は白米で5キロ3100円前後。 問合せ:佐渡市農林水産課2 0259-63-5117

シナイモツゴ郷の米



希少種シナイモツゴが生息しているのは、 生息地のため池の水質や生態系が良好に保た れている証。との考えから、シナイモツゴが 生息するため池の水で栽培したお米をブラン ド化し、販売に協力。それにより、田んぼの 環境を保全し、シナイモツゴ保護に貢献して くれる農家を応援するのが「シナイモツゴ郷 の米認証制度」です。大崎市こだわり農産 物認証米。ひとめぼれ白米5キロ2200円、 玄米同2000円など(いずれも税込)。問合せ: シナイモツゴ郷の米つくり手の会 ☎ 0229-56-5746)

トゲソ米



2008年から農薬や化学肥料を5割削減し たトゲソ米 (1 キロ 500 円) を販売してきた NPO 法人五泉トゲソの会ですが、今年から お米やしそ南蛮(味つけ味噌)など特産品全 5種のセット「トゲソのたもて箱」を販売開 始。通年販売のおまかせセット (3300円) も魅力ですが、名前の通り食感つるつるの「つ るつる芋」(里芋)がセットされた秋普通セッ ト (3300円) や秋ミニセット (2200円) は これからのお楽しみ。特産品販売でトゲソの 保護活動を持続する道を探ります。問合せ: 同法人 ☎ 0250-47-444

本当に魚を増やしている田んぼのお米



(株)CAF(岐阜県海津市)とサトガワキカ クLLC(大垣市)は、実際に魚を増やしてい る田んぼのお米を販売。魚道を設置した水田 で、日々遡上状況などを調査しながら魚を増 やす管理で減農薬のお米を生産しています。 パッケージには増えた魚の種類と数を明記す るなど、食べることで直接保全につながるこ とを消費者に伝え、具体的な生物多様性保全 をすすめています。5キロ5000円(予定)。 問合せ:サトガワキカク LLC 20584-73-6682 または http://www.satogawakikaku.com (近日掲載)

■ 編集後記

残された自然の豊かさを子どもたちに体感してもらい、生きものをかけがえがないと思う気持ちとともに育ってほしい。それは水辺保全活動に取り 組むすべての人の願いだと思います。子どもたちにそうした経験を提供する重要性もますます高いと感じています。今号ではそうした取り組みを中心 にご紹介しました。今日の日本には、いろいろなアプローチの自然体験がいっぱいです。大人もぜひ一緒にフィールドに出て、楽しみ学んでください!!(裕)